

第五回日本結核病學會演說要旨

一、肺結核患者植物神經機能異常（第二報）

渡 邊 三 郎君（大療養所）

生體ハ、結核罹患ニヨリ其植物性機能ニ變調ヲ來シ、刺戟ニ對シテ過敏不安定トナル。

著者ハ「アドレナリン」敏感度ヲ示標トシ、臨牀的ニ、諸種ノ刺戟ガ結核個體ノ植物性神經機能ニ、如何ナル影響ヲ及ボスカヲ究メムトシ、今回ハ先ヅ刺戟トシテ、「ツベルクリン」皮内注射、A・O皮下注射（以上特種）自家血液竝ニ大腸菌「ワクチン」皮下注射「コロイド」銅血管内注入（以上非特種）ヲ選ビ是等ガ、生體「アドレナリン」反應ニ及ボス作用ヲ檢索シタルニ。

（一）以上ノ所置ハ何レモ、一部例ニ於テソノ敏感度ヲ亢進（交感性機能亢進）、他例ニ於テ之ヲ低下（交感性機能抑制乃至副交感性機能亢進）スルノ方向ニ作用シ時ニ二相型ヲ表シ。

（二）刺戟ノ效果ハ數日ニテ消失シ、又ハヤ、久シク保持サル、場合アリ。

（三）作用ノ方向ト效果ハ恐ラク個體ノ當時ノ狀態ト刺戟量ニヨリテ支配サレ。

（四）特種刺戟ハ比較的極微量ニテ他ト同一ノ效果ヲ發揮スル。

ヲ知リ、刺戟（廣義ニ）ハ先ヅ個體ノ植物性機能平衡ニ衝動ヲ與ヘソノ作用ヲ發揮ス可キヲ確メ得タリ。

二、關節結核ノ成因ニ關スル研究（第二報）

辻 川 健 次君（大療養所）

「モルモット」ノ血中ニ人型結核菌ヲ注入シ、關節滑液膜ニ起シ來ル結核性病變ヲ時ヲ逐ヒテ檢スルニ、滑液膜小血管ノ周圍ニ小結節ヲ生ジ漸次増大スルモノト、骨髓ノ結核病竈ヨリ靜脈管ヲ傳ハリ滑液膜ニ擴ガルモノトアリ、然シテ豫メ過伸過屈ヲ施シ、多小ノ傷害ヲ與ヘ置キタル滑液膜ニ於テ、殊ニ多ク且ツ強度ニ病變ヲ來ス以所ハ、極メテ少キ出血或ハ其他ノ組織傷害ノ爲メニ炎症ヲ起シ、組織球性細胞ノ活動ヲ來シ、血中ニ送入セラレタル異物(墨汁又ハ結核菌ノ如キ)ガ局所ノ毛細管壁内皮細胞及ビ組織球性細胞ニ盛ニ攝取セラレ此ノ所ニ固定セラル、ニヨルモノナリ。

三、新潟有明療養所患者戶外臥牀成績(第二報)

竹山 九郎君(新潟)
佐藤 愼治君(療養所)
坪谷 毅一君

昨年四月東京ニ於ケル本學會總會ニ報告セル新潟市市立有明療養所患者數名ニツキナホ引キツバキ屋外(寫眞參照)松林中ノ葭簣張り粗末ナル小屋中ニ晝夜トモ臥牀シ得タル臨牀上ノ成績ニツキ報告ス。
之ニ依ツテ觀レバ北越新潟地方ノ如ク從來氣候不順ノ地トセラレシ地方(氣象觀測統計參照)ニテモ春夏秋冬四季共ニ病症ニヨリテ戶外療法ヲ實行シ得ルト思考セラル。

四、肺結核患者ノ臥位ニ就テ

加藤 三郎君(東京)
(療養所)

合計一、一二三名ノ肺結核患者ノ發病前後及現在ノ臥位ト、患者ガ一定ノ臥位ヲトレル原因の動機ニ就テ統計的調査ヲナシ猶治療ノ目的ヲ以テ一定側臥ヲ命ジタル例ニツキテ其經過ノ觀察ヲナシタリ。

即チ患部ノ左右何レナルカニ拘ラズ右側臥ヲ取ルモノ多ク其中從來ノ習慣ニ因ルト稱スル者少カラズ、又胸部症狀ノ關係ヨリ一定側臥ヲ取ルモノニ於テモ病變ガ左右何レナルニ拘ラズ左側臥ヲ苦痛トシ右側臥ヲ取ルモノ多シ、是主トシテ心臟ノ關係ニヨルモノニアラザルカ。

猶偏側患者ハ體位ノ左右何レニ拘ラズ兎ニ角患部ヲ下ニスベキコト合理的ナルベシトノ說多キヲ以テ余ハ試驗的ニ六〇名ノ患者ニ特ニ患側臥ヲ命ゼシニ其中命令ヲ遵守セザリシモノ二〇名(患部左一六名右四名)アリシガ此中若干ハ明ニ自己ノ我儘ニ因ルモノアリ他ノ一部分ハ此位置ヲ苦痛トシテ遵守セザリシモノ、而シテ殘餘四〇名ノ中一八名(患部右一〇名全部Ⅲ期)ハヨク此位置ニ堪ヘタリシモ開始後五ヶ月乃至十一ヶ月ノ後死亡セリ一〇名(患部左四名二期乃至Ⅲ)輕快退所シ二名(患部左三名右六名)現在尙繼續セリ。

右四〇名中經過ハ種々ナルモ其全部ニ於テ症狀ハ體位變換ノ際輕快ヲ見タリ、更ニ興味アルハ從來ノ習慣上患部ヲ下ニナストキハ胸痛、心悸昂進、呼吸困難等ヲ訴ヘテ患部ヲ下ニスル事ヲ欲セザリシ患者アリシモ徐々ニ舊慣ヲ破リテ下ニスベキヲ說キシニ遂ニ之ニ從ヒ臥位ヲ改メ得テ苦痛ノ輕減ヲ覺ヘシモノ前記四〇名中六名(一五・〇%)(患部左二名右四名)ナリ又他ノ三四名ノ患部ヲ區別スレバ左一一名右二三名ヲ示セリ。

故ニ大體ニ於テ患側ヲ下ニスレバ症狀輕快スルト云フコトハ認メラルレドモ此關係ハ特ニ患部ノ右側ニアルモノニ多ク見ラル、所ニシテ患部左側ニ在ルモノニ於テハ必ズシモ然ラズ。

四ニ對スル附議

三 戸 時 雄君

一般ニ外科的患者ハ患側ヲ上ニ、内科的患者ハ患側ヲ下ニ臥位ヲトル者多シ。急性肺炎ノ患者ニ付テ見ル時ハ大部分ガ患側ヲ下ニシテ臥位ヲトル(大正九年中外醫事新報參照)、此現象ハ單ニ習慣ニ基因スルト解釋スル以外ニ自然防禦ノ意

味ガアル者ト解スベキナラン。

五、新潟有明療養所ニ於ケル喀血ト氣象トノ關係ニ就テ

佐 藤 愼 治君(新潟療養所)

喀血ノ成因ニ就イテ論ズル場合ニハ多數ノ條件ニ就イテ考慮スルヲ要ス。而シテ喀血ナル一症候ハ是等ノ複雑ナル要件ガ相錯綜シテ初メテ出來スルモノナランモ今他ノ要件ヲ暫ク保留シテ單ニ氣象的見地ヨリ觀察スルトキハ如何ナル關係ヲ有スルモノナルヤヲ比較的他ノ要件ヲ除外シ得タル喀血例ニ就イテ其ノ頻度ヲ月別ニ觀察セルニ、從來我が國ニ於ケル結核ニ關スル成書ノ記載或ハ報告ト多少異ナル成績ヲ得タリ。

此レ新潟ガ從來ノ報告者ト地理的關係ヲ異ニスル爲種々ナル氣象要件モ亦異ナルニ依ルモノナランカ。

余ハ大正十三年八月ヨリ同十五年十二月ニ至ル有明療養所ニ於ケル喀血例ヲ調べテ十二月、一月、八月、三月、四月、二月、十一月、七月、五月、六月、十月、九月ノ順ニ減少セルヲ知レルヲ以ツテ喀血頻度ノ多キ月ノ氣象要件ニ就イテ述ベントス。

五ニ對スル附議

太 繩 壽 郎君

喀血ノ發因ニ關シテハ多クノ條件ガ關係アルコトハ演者ノ述べラレタル如シ大阪市立刀根山療養所ニ於テハ氣象關係ニ就テ具體的調査シタルニ非ザルモ多年ノ經驗上冬季蒸氣暖房裝置ヲ使用スル初期ニ喀血發症ノモノ増加スルヲ見ル。

六、肺結核患者ノ精神狀態並ニ生殖機能ニ關スル調査

(精神感動調査第二報)

春 木 秀 次 郎君
涌 谷 重 治君
(東京療養所)

田澤所長ガ昨年肺結核一般療法(宿題報告)ノ一部トシテ述ベラレタル精神感動影響調査ノ繼續トシテ調査セラレタル所ヲ取纏メ其第二報トシテ茲ニ報ズルモノナリ。

肺結核患者ニ來ル精神狀態ノ變化及ソノ原因ニ就テ問診セル點ノ小統計。

肺結核患者ニ於テ生殖機能ニ關スル變化及ビソレノ病勢ニ及ボス影響ニ就テ問診セル事項ノ小統計、肺結核患者ノ性慾ニ就テ問診セル事項ノ小統計。

七、『クリオゲニン』ノ諸臟器ニ及ボス影響ニ就イテ

近 璋 太 郎君
(北海道帝大)

家兔ニ毎日「クリオゲニン」ヲ經口のニ與フルニ貧血發來ス。體重每貳〇・二五瓦投與家兔三匹ハ平均七日目ニ死シ〇・一瓦投與ノ四例ハ一例ノ他約三十日ニテ斃シ〇・〇二五瓦投與例ハ約六週間ノ觀察期中健存セリ。速カニ斃死セザルモノニテハ貧血ハ漸次進行スルモノニハ非ズシテ一進又ハ著明ナル恢復ヲ示ス。〇・二五瓦例ニテハ血色素尿管柱變性腎細胞ヲ認メタリ。尿量體重ハ對照ニ比シ大差ナキモノ、如シ。

諸臟器ヲ檢索スルニ肝臟ニハ多數ノ小壞死病竈ヲ腎臟ニテハ皮質部上皮細胞ノ變性又ハ壞死ヲ認ム。大腿骨骨髓ハ造血狀態ニ在リ。カ、ル變化ハ〇・〇二五瓦投與即チ體重六十斤ノ人ハ毎日一・五瓦ヲ與フルト等シキ量ニテモ尙見ルヲ得。

カク「クリオゲニン」ハ血液及ビ臓器ニ對スル毒物ナルガ故ニ臨牀上ソノ使用ハ制限セラルベクソレ自身ニテ貧血ヲ招來シ得ル結核ニ賞用セラル、本劑ハ患者ニ惡影響ヲ與ヘウベキモノト信ズ。

七ニ對スル附議

一、

岡

治

道君(東京療養所)

東京市療養所ニテ經驗セル「クリオゲニン」ノ臨牀的竝ニ病理解剖學的所見ヲ追加ス。鴻上氏八例、寺尾氏五例(内一例下熱)、石川氏五例(三例下熱)、鈴木氏四例(一例下熱)、田原氏二例(共ニ下熱)、合計二四例中一七例ニ效無キヲ見タリ。是等ハ何レモ重症結核ニシテ、投與量〇・四乃至〇・六。其結果ヲ綜合スル時ハ下熱ハ第二乃至四日ニ大體分利狀ヲ呈シテ行ハレ、下熱期間ニハ弛張甚少シ、然レドモ投與ヲ停止スル時ハ一乃至四日ニシテ發熱舊ニ復ス。下熱スルモ脈ノ之レニ伴テ下ラザルモノアリ。如斯ハ豫後不良ナリ。多クハ蛋白尿、腎炎ノ症狀ヲ起セルヲ以テ三乃至七日間投與後停止セリ。投與停止後五日ニシテ浮腫ノ現ハル、モノアリ。右ノ内田原氏ノ二例ハ何レモ殆ンド同様ノ症狀ヲ呈シ、一日量〇・六宛五日及六日投與後停止セルニ前者ハ二週間、後者ハ十日後死亡セリ。後者ハ之レヲ解剖セリ。本例ハ二八歳女、投與停止後四日目浮腫、七日目意識溷濁、尿量甚シク減少ス。解屍ノ結果、肺ハ細葉性結節性増殖性結核ニシテ重症ナレドモ未ダ死ノ轉歸ヲトル程ニ非ズ。腎ノ皮質及ビ中間層ノ溷濁腫脹高度ニシテ、絲毬體ノ侵サル、事少ク、主ナル病變ハ主管部及ビ移行部ノ細尿管上皮細胞ノ脂肪變性ナリ。其他心筋ノ溷濁甚シク、肝ハ脂肪肝ヲ呈ス。心及ビ肝ノ所見ハ必シモ「クリオゲニン」ノ直接作用ニ非ル可ク、尿毒症ニ關スルモノアルベシ。上記ヲ總括スルニ「クリオゲニン」ハ重症結核ニハ效少キノミナラズ腎ヲ害シ、爲メニ死ニ導クノ危險ナシト云フ能ハズ。

二、

馬 島

禎

人君(名古屋好生館)

余ハ「クリオゲニン」ニ因ル實驗的貧血ニ就テト題シ昨年七月及十一月ノ二回好生館醫事研究會雜誌ニ發表セリ、尙免疫體ニ及ボス影響、赤血球沈降速度、赤血球抵抗、腎臟機能等ニ就テ研究シ近日發表セントス、組織學的研究ハ尙發表ニ至ラザルモ脾ハ多クノ例ニ於テ著シク腫大シ、被膜、脾材ノ肥厚ハ認メザルモノ多ク、脾髓質ハ血液及黃褐色ノ色素顆粒ニ富ミ靜脈竇ハ擴張シ骨髓細胞、有核赤血球ヲ認ム、骨髓外造血現象ヲ認ム。肝ハ各小葉ニ於テ中心靜脈擴張シ毛細血管擴張亦著シク擴張ス、肝索ノ放散狀配列ハ不正ニシテ相交叉シ「デスロカチオン」像ヲ呈スルモノアリ、實質上皮細胞ノ渾濁腫脹セルモノアリカ、ルモノハ隣接細胞トノ境界不明トナリ核ハ融解又崩壞ニ陥リ又時ニ核ノ著シク大ナルモノモアリ、腎臟ハ絲絨體及細尿管ノ上部ニ於テ變化ヲ認ムルモノ多シ。

八、結核化學療法ト「アフチミン」

山口 幸 助君(大阪)
結核ノ化學療法の考察ノ基ニ合成セラレ臨牀上相當效果ヲ舉ゲ得タル「アフチミン」(N・金「アミノ」酸)ヲ紹介ス。

九、結核豫後測定諸反應ノ比較試驗續報

大角 眞 八君
木下 禮 治君(東京高輪病院)
栗原 四 郎君

大角及飯田ハ昨年赤血球沈降速度測定、マテフィー氏反應及血中「ビリルビン」含有量測定ヲ行ヒ、同時ニ淋巴球數、尿ノ「チアツォ」反應「ウロクローム」反應ヲ檢査シテ沈降速度ハ普通人ノ十倍以上、マテフィー氏反應ハ卅以上、淋巴球ハ二

十%以下ノ場合豫後不良ナルヲ認メ「ビリルビン」系數ハ不定ナルガ爲メ溶血ノミニヨリテ豫後測定ヲナスコト不可能ナリ。又「デアッオ」、「ウロクローム」兩反應ハ豫後ノ不良ヲ示ス。而シテ前記反應中最モ確實ナルハ淋巴球數ノ低下ナリト本學會ニ於テ報告セリ。著者等ハ其後「ビリルビン」測定ヲ除キタル他ノ諸反應検査ヲ續行シ之ニビルケー氏反應、單核白血球検査及「レントゲン」検査ヲ追加セリ。

九ニ對スル附議

一、

佐々虎雄君

赤血球沈降反應ノ速度ハ健康人ト雖モ相當ノ移動アルヲ信ズルモノナレバ患者赤血球ノ沈降速度ヲ云々セルニ健康者ノ幾倍ナリト云フガ如キハアル意味ニ於テハ正鵠ヲ得ルコトナキモノト思フモノナリ。

二、

大角眞八君

赤血球沈降速度ノ不定ナルハ血漿及血球ノ二方面ニ於ケル膠質狀態ニヨルガ故ニシテ之レガ爲メニ余ノ測定法ノ斷定ニハ之レヲ用ヒズ、サレドモ余ノ健康者ノ速度ト述ベタルハ三十名以上ノ健康者ノ平均ナレバ大體ニ於テ標準トシテアヤマリナシト信ズ。

一〇、結核患者唾液ノ澱粉消化力ニ就テ

佐々木流道君(大療養所)

唾液腺ハ單ニ外分泌腺タルニ止マラズ、内分泌腺トシテモ特殊ノ意義ヲ有シ他ノ内分泌腺ト夫々親密ナル關係ヲ有セルモノナルコトハ輒近實驗證明セラレタル事實ナリ。而シテ結核感染ニ於テ内分泌腺ガ著シク影響ヲ被ルコト周知ノ事實

ナルヲ以テ、結核感染ガ唾液腺ノ機能ニ對シテ一定ノ影響ヲ與フベキハ想像ニ難カラズ。於茲余ハ這般ノ關係ヲ窺ハントシテ、輕重幾多ノ結核患者ニ就テ其唾液澱粉消化力ヲ、ウオールゲムート氏(井上氏改良法)法ニヨリテ檢査シ、其成績ヲ統計的ニ觀察シ且ツ他ノ内分泌腺トノ相互關係ニ向テ一瞥ヲ須ントス。乃チ

一、結核患者ノ唾液澱粉消化力ハ健康人ニ比シテ減退ス。

二、病機増進ト共ニ唾液澱粉消化力ハ漸次減退スルモノ、如シ。

三、輕症者ニアリテモ發熱持續セルモノ、消化力ハ減退セルヲ認ム。

一一、結核患者榮養障礙ノ成因ニ關スル一新考察竝ニ其對策

高 龜 良 樹君(廣 島)

結核患者榮養障礙ヲ惹起セシムベキ有力ナル成因トシテ内分泌腺ノ機能障礙及消化腺ノ機能障礙ニ著目シ之ニ對スル療法ニ及バントス。其梗概ヲ摘録スレバ左ノ如シ。

一、結核感染動物ノ脾臟ハ病機進行ト共ニ漸次萎縮、變性、機能障礙ヲ來ス。

二、結核感染動物ノ肝臟ハ硬變、變性、機能障礙等ヲ來ス。

三、結核感染動物ノ甲狀腺及副腎ハ夫々特有ナル變化ト機能障礙ヲ來ス。

四、結核患者ニアリテハ唾液「アミラーゼ」ノ減退、胃酸減少ヲ來セルモノ多シ。

敍上ノ事實ニ立脚シテ脾、肝、甲狀腺ノ複合臟器製劑ヲ創案シ之ヲ應用シテ榮養恢復ヲ速カナラシメタル實驗ヲ追加ス。

一二、肺結核患者ノ食慾不振ニ對スル「インシュリン」ノ應用ニ就テ

佐々虎雄君(東京療養所)

頃者「インシュリン」が糖尿病治療以外ノ目的ニ應用セラレ而モ相當效果ヲ認メラレタル場合ノ報告少ナカラズ。患者ノ食慾増進及ビ體重増加ニ於ケルガ如キコレナリ。故ニ余ハ肺結核患者ニ於ケル場合ヲ見ンガタメ東京市療養所入院患者ニ就テコレガ臨牀的實驗ヲ行ヒツ、アリ。今日マデノ治療例ハ三〇名ニシテ得ラレタル成績ノ大略ハ左ノ如シ。

患者ハ病期病型ノ如何ヲ問ハズ主トシテ食慾不振又ハ胃部膨滿感ヲ訴フル者ヲ選ミタリ。注射ハ皮下トシ、用ヒタルハ邦製「インシュリン」即チ「インゼリン」ナリ。一日二回毎晝食前及ビ夕食前トシテ三單位宛(時ニ四——五單位)ヲ與ヘ空腹感ノ發現ヲマチテ食ヲ取ラシム。大多數即チ二十四例ニ於テハ程度ノ相違コソアレ大凡三十分前後ニ於テ空腹感現レ從ヒテ食慾ヲ増進ヲ見、且ツ食後胃部膨滿感ノ消失アリ。全然效果ナカリシハ僅々四例ニスギズ。

副作用トモ見ラルベキ胸部壓迫感又ハ心悸亢進ヲ來セシ例アリシモ一時性且ツ輕度ニ止マリ却ツテ一時的ニ氣分ノ良好ヲ來セシ例ハ約三分ノ一ナリ。喀血ハ一例ニ於テ見、發熱ハ二例モ無シ。體重ノ増加ハ著明ナラズ尿量ニ變化ナシ。注射ノ效果ハ開始後多クハ直ニ見ハル、モ永ク續ケオル時ニハ其ノ效果ノ減弱ヲ見ルハ全例ヲ通ジテ同様ナリ。例數尙少ナク目下實驗繼續中ナレバ斷言ハ避クベキモ今日マデノ成績ヨリシテハ肺結核患者ノ食慾不振ニ向ヒテ「インシュリン」ハ適當ノ注意ノ下ニ於テ應用スレバ何等ノ副作用ナク應用シ得テ而モ相當效果ヲ收メウベキモノト信ズルモノナリ。

一二二對スル附議

一、

錦織末富君

私ハ平素次ギノ如キ假說ヲ胸中ニ畫イテ居マス、即チ「吾人ノ身體ニウケル障礙トソノ抵抗トヲ比較シテ見テ若シ障礙ノ

方ガ抵抗ニ比シテ僅カニ大デアルトキハ生活神經ノ平衡トイフ見地カラ見ルト迷走神經緊張狀態トナリ又障礙ガ非常ニ大キイトキハ交感神經緊張狀態トナル」ト(此假說ノ根據ハ種々アリマスガ時間ガナイノデ述ベマセヌ)、ソコデ肺結核ノ様ニ種々ナ程度ノ障礙ヲ與ヘ得ル疾患殊ニ經過ノ甚ダ永イモノデハ患者ノ生活神經ノ緊張狀態ハ種々デアル、之レヲ胃腸ニツイテ見テモ同様ニ食慾不振ヲ訴フルモノデモ或ハ胃酸過多ガアリ或ハソノ減少ガアル、或ハ單ニ局所的ノ強イ「ワゴトニー」ノ症候トシテ下痢ヲ來スコトモアル。其他種々ノ狀態ガアルデアリマセウ。ソコデ之レニ對シテ「インシュリン」ヲ注射スル場合ニハ必ズヨク患者ノ生活神經ノ平衡狀態ヲ觀察シテ適量ヲ與ヘスト却ツテ惡結果ヲ來スコトニナル即チソノ程度ハ「インシュリン」ニヨツテ副交感神經ノ緊張ヲ患者ノ現在ヨリモ僅カニ高メルノヲ目標トシ之レニ對スル生體ノ適當ナル反應ヲ利用スベキデアルト思フ、之レハ他ノ非特殊性刺激療法ニ於テモ適用セラルベキコト思ヒマス。

一一、

長 島 豐 治君

追加 余ハ肺結核患者ニ演者ト同一ノ目的ノ下ニ「インズリン」ヲ用ヒタルニ僅カニ五單位ノ「インズリン」ト十%葡萄糖液二〇珽ヲ併用セルモ血糖過少症ヲ起セル例アリシヲ以テ使用ニ當リテハ注意ヲ要ス。血糖過少症ヲ起セル時ハ「アドレナリン」ヨリモ葡萄糖注射ノ方效早シ。

一二、肺結核ノX光線寫眞撮影ノ新技術竝ニ該立

體鏡像ニ就テ (寫眞供覽)

宮 原 立 太 郎君(東京)

肺結核ノ解剖的狀態ヲ臨牀上ニ窺フ目的ニ優秀ナルX光線寫眞撮影ニ關シテハ十數年來吾人ノ苦心セル所ナリキ。之レ單ニ透視ニ因ルヨリハ寫眞ガ一層明劃微細ニ且後日ニ保存シ得レバナリ。而シテ之レニ要スル器械モ種々ノ改良進歩ア

リキ就中米國ニ於テハ十數年前無瓦斯管球タル「クウリーヂ」管球ノ發明アリテ以來其能率優秀ナルヲ以テ次第ニ採用サレ從來ノ瓦斯管球ハ消滅セリ、獨逸ニ於テモ此無瓦斯管球ガ次第ニ採用サレ本邦ニモ近年輸入サル、ニ至レリ。

吾人ハ胃腸四肢ノ如キハ數年來無瓦斯管球ヲ採用セリト雖モ肺臟ノ瞬時寫眞撮影ニ關シテハ瓦斯管ヲ放棄シ得ザリキ、然シナガラ瓦斯管ハ每常其ノ硬度ノ調節ヲ要スルヲ以テ肺ノ寫眞トシテハ硬軟適當ノ程度ヲ失シ易キ缺點アリキ、從テ柔軟ナル肺組織ヲ完全ニ撮影シ得ル場合少ク寧骨系統ノ觀察トシテ適當ナル場合アリキ。余ハ聖路加國際病院ニテ「ビクタ」會社製裝置ニ「クウリーヂ」管球ヲ應用シ肺ノ鮮明ナル寫眞ヲ一昨年來ヨリ見ルヲ得タリ、此ノ裝置ノ要點ハ交流ノ殆ンド全部ヲ整流シ「クウリーヂ」管球ヨリ硬軟混合ノX光線ヲ發生シ以テ肺組織ニ適當ナル寫眞ヲ得セシム。

從來和製ノU型「クウリーヂ」管球ハ米國製ニ比シテ其能率劣等ナリト說アリキ、兎ニ角和製ニテ好良ナル肺ノ寫眞ヲ得難カリシヲ以テ余モ管球或ハ器械ノ何レニカ缺點アルベキモノト思惟セリ。然ルニ「ビクタ」裝置ニテ和製ノU型ヲ使用シテ撮影セルニ米國製ト同様ノ好良ノ結果ヲ得タリ。因テ和製器械ニ「ビクタ」型整流機ヲ模造セルニ果セルカナ、同等ノ寫眞ヲ得ルニ至レリ、次ニ從來吾人ハ肺ノ前後面ヨリ撮影スベキ規則ヲ略シテ先ヅ透視ニ因リ病變ガ前後面ノ何レニ多キヤヲ確メ其ノ蔓延セル方面ヨリ一葉ノ寫眞ヲ撮影スル場合多カリキ、然ルニ立體鏡寫眞ニ因レバ立體的ニ肺ノ內部狀態ヲ鑑察シ得ルヲ以テ模範的ノ撮影法ナルコトヲ推奨セントス。

終ニ和製ト米國製ニ因ル寫眞竝ニ立體鏡寫眞ヲ供覽ス。

一四、人工氣胸療法實驗第二回報告

永井 秀太君(東京)

大正六年內科學會總會ニ於テ、本題ノ報告ヲ爲シテヨリ、正二十年此間ニ本法ヲ施行シタル無數ノ患者中ヨリ、一百四十六名ノ稍々要領アル結果ニ到達シタル者ヲ拔萃シ、聊カ綜合的觀察ヲ試ミ、其結論ヲ茲ニ報告セントス。

適應症ニ關シテ

一、一側性重症増息型(慢性)ニシテ、最後ノ豫後ニ疑ヒノ存スル者ニハ、全部本療法ヲ適用シテ可ナリ。
二、亞急性滲出型ノ者モ、豫後ノ不良ヲ想像シ得、且ツ本法奏效ノ時間的猶豫ノ存スル者ニハ、時ニ本法ヲ試ミテ可ナリ。

三、慢性兩側性ノ者モ、本法施行可能ノ者多シ。

四、喉頭結核ノ合併モ重症ナラザレバ、本法施行ノ妨ゲトナラズ。

五、女子ハ年齡ニ關係セズ、男子ヨリ氣胸ヲ完成シ得ル者多シ。

六、爾他ノ諸治療法ニ依リテ恢復ノ望ミアル患者ニハ、本法ヲ施サズ。

手術ニ關シテ。

一、穿刺部位ハ前後腋窩線内ニ於テ、第四乃至第六肋間好適スルモノ、如シ。

二、氣胸構成ノ能否ハ、穿刺針ノ感觸ニ依リテ、大約想像シ得ルヲ以テ無用ノ穿刺ヲ避ク可シ。其他二件、合併症ニ關スルモノ、肋膜滲出液ノ貯溜ヲ屢々見ルモ、多クハ手術ノ目的ヲ妨ゲズ。膿胸モ稀レナラズ。

手術中ノ危險症ハ充分ノ注意ヲ拂ヘバ、全ク無シト稱シテ可ナリ。

治療成績ハ統計的ノ數字ニ依リテ判斷スル能ハズ。

終決、爾他療法ニ依リテ、充分ナル勝利ノ結果ヲ得ル見込ノ無キ患者間ニ於テ、本法ノ適用範圍ヲ極度ニ擴大ス可キモノト信ズ。

一五、重症肺結核ニ於ケル人工氣胸療法ノ適應症ニ就テ

持 木 丈 二 郎 君
田 原 敏 夫 君
(東京市療養所)

東京市療養所患者七二六名ニ對シ人工氣胸ノ適應法ヲ觀察セル統計ヲ述ブ。適應症ノ範圍トシテ(一)他側ノ狀態ハ非活動性乃至停止性ナル硬化性又ハ増殖性病變ニシテ廣汎ナラザルモノ。(二)癒著ハ有效ナル部分的氣胸ヲ作り得ベキ程度ヲ可トシ。(三)禁忌ナル合併症殊ニ腸結核ニ注意ス。以上ノ條件ヲ以テ可能性アルモノ一二四ヲ得、更ニ經過ヲ見テ再診査セル結果、氣胸ヲ作リタルハ二六(三・六%)、此内第二期一〇(右八・左二)第三期一六(右一・左五)ニシテ他ハ兩側ノ變化、著シキ癒著等ノタメニ不能ナリキ。

此適應症ヲ以テ療法ヲ施行スル場合特ニ注意スベキハ他側ノ狀態ニシテ、徐々ニ必要ナル氣胸ヲ作ル方法ヲ可トス。尙、此方針ヲ以テセバ更ニ他側ノ變化著シキ場合ニモ應用スルヲ得ンカ。

一四及一五ニ對スル附議

一、

村 尾 圭 介君

人工氣胸施行適應症ハ「マニフェスト」ニシテ彈力纖維ヲ喀痰中ニ證明セル如キハ症狀病窩ノ程度ニ全ク關係ナク早期ニ實行スベシトイフ方針ニ賛成ス。

現在ハ嘗ツテ東京市療養所ニ於テ行ヒタルトホゞ同様ノ目安ニテ六例施術繼續中ナリ。

二、

近 藤 乾 郎君

私ノ所デモ昨年來九例ノ人工氣胸療法ヲ行ヒマシテ成績ハ佳良デアリマスガ永續スルノガ尠ナクテ困リマス、何カ善イ方法ハアリマセンカ、又危險ハ絶對ニアリマセンカ？横隔膜神經切除術等モ行ハレタ例ガアリマスカ。

三、

三 戶 時 雄君

本術ニ伴フ所謂危險トシテ肺部穿刺ノ場合ヲ舉ゲラレタルモ、自分ハ肺部穿刺ハ壓力計ノ觀察ニヨリテ全ク避ケ得ラルルノミナラズ、實際的ニハ鈍針ヲ用ユルヲ以テ、大ナル健康血管壁ヲ損傷スル場合ハ起ラザル者ナリ、然ドモ厚皮形成中ノ大ナル血管ハ血管ガ移動シ得易カラザルヲ以テ切開法ニヨラズシテ鋭針ヲ用ヒル時ハ是等ノ血管ヲ損傷シ易クシテ茲ニ空氣栓塞ヲ起ス危險ガ生ズル者ナリ、是レ危險ノ最大ナルモノナリ、シカモ是等ノ危險スラ、切開法ニヨル時ハ鈍針ヲ用ヒ得ル故全ク起ラザル者ナリ。

四、

星 野 信 夫君

人工氣胸療法ノ施術ニ、絶對ニ危險ヲ伴ハザルヤ否ヤニ關シ、永井博士其他ノ注意シ行ヘバ絶對ニ危險ナシトノ御說ニ關シテハ余ハ熱心ナル本會員ニ對シ緊急追加シテ一言ナキ能ハズ、即チ余等ハ屢々地方ノ一般開業醫ヨリ本療法ニ關シ意見ノ開陳ヲ迫マル、機會ニ遭遇セリ。余ハ何等ノ危險ヲ認メザリシ少數例ヲ經驗セル後數年前九州鳥栖ニ於ケル某結核療養所ニテ療法ヲ施行セル三例中二例（一例ニ立會ス）ニ於テ十二時間以内ニ不幸ノ轉歸ヲ取リタルヲ知レリ、（手術ノ際「マノメーター」ノ上下ハ三乃至三・五糎ナリキ）然ラバ一般開業醫ニ於テハ少クトモ經驗アル諸家ニ就キ實驗ヲ見學又ハ指導ヲ受ケテ後始メテ實行スベキモノナルコトヲ特ニ注意セント欲スルモノナリ、何トナレバ其裝置及ビ醫師ノ勇敢サ如何ニヨリテハ絶對ニ危險ナシトハ云ヒ難ケレバナリ。

五、

田 澤 鏐 一二君

（二）左肺ノ大部分及右肺ノ比較的小部分ニ病竈ヲ有シタル患者右側ニ自發的氣胸ヲ起シ爲ニ呼吸困難強度トナリ嘔吐冷汗等險惡ナル症狀ノ著明トナレル患者アリ村尾君ニ依頼シテ人工氣胸術裝置ニ依テ逆ニ空氣ヲ排除シタルニ急ニ諸症狀

ノ去レルヲ見タリ。此患者ニ於テハ同様ノ經驗二回ニ及ベリ。事柄ハ珍トスルニ足ラザル可キモ其險惡ナル症狀ノ消失スルコト餘リニ鮮ヤカナリシヲ以テ敢テ附言シオカントス。尙斯ル場合ニハ重症ナリシ左肺ノ安靜破ラレテ病竈ノ急ニ増惡セシコトノ憂大ナルヲ以テ右側ノ排氣ハ殊ニ恩惠ヲ感ゼシムルモノト考ヘラル。

(二)前者ト同様ニ症狀ノ變化特ニ著明ナリシ故ヲ以テ簡單ニ報告シ置カントテ今日矢部君ガ演題ヲ掲ゲタル一例アリ同君缺席ノ故ヲ以テ要點ノミヲ代演シオカン。ソレハ肺結核患者ニテ多量ノ肋膜炎滲出液ヲ有シタリシ患者アリ單純ニ穿胸ヲ行フコト二回目ニシテ液ノ大部分ヲ排除シタルニ其後急ニ「ラッセル」著明トナレリ故ニ次回ニハ穿胸ノ後田原君ノ手ニ依テ人工氣胸ヲ行ヒタルニ「ラッセル」モ増サズシテ良好果ヲ得タリ、肋膜炎穿胸ニ當テ空氣ヲ送入シツ、行フ法ハ文獻ニモ乏シカラズ佐藤勤也氏明治四十四年ノ內科學會總會ニテ文獻及自己ノ經驗ヲ述べ居レリ。思フニ肺結核ノ際ニハ穿胸後肺ノ安靜ノ破ラレン恐レアルヲ以テ、之レニ人工氣胸ヲ兼ヌルハ殊更ニ推賞スベキ處置ト見做シ得ル理ニアラズヤ(矢部述)。

一六、呼吸器内ニ於ケル氣流ノ研究

附、鼻中隔彎曲ト肺臟罹患側トノ關係

酒 井 由 夫君(東京帝大)

余ハ大正十三年十月ヨリ翌大正十四年五月迄約半ケ年ニ亙リテ労働者ノ體格検査ニ從事セシコトアリ其際上氣道特ニ鼻中隔彎曲ノ検査ノ結果左側性C形中隔彎曲ノ最大多數ナルヲ見テ鼻中隔彎曲ノ肺炎疾患ノ左肺ヨリモ右肺ニ多キ事ト何等カノ關係アルニ非ルカニ想到シ、先ヅレントゲン検査ニヨリテ肺臟内ニ表レ來ル陰影ト鼻中隔彎曲ノ存在セザル側即チ鼻腔ノ廣キ方ノ側ノ肺臟ニレントゲン陰影多キヲ確メ得タリ。

茲ニ於テ吾人ノ左右兩鼻腔ヨリ吸入セラレタル空氣ハ分レテ各々同一側ノ肺ニ進入スルモノナリヤ或ハ其咽頭及ビ氣管

ヲ通過スル際互ニ混合シテ肺ニ達スル空氣ハソノ何レノ鼻腔ヨリ吸入セラレタルモノナルカヲ知ル能ハザルモノナリヤノ疑問ヲ生ジ之ヲ既往ノ文獻ニ求メタレドモ斯ノ如キ問題ノ取扱ハレタルヲ見ズ、依ツテ余ハ之ガ解決ノ任ニ當ラント欲シテ先ヅ動物實驗ヲ行ヒ一方ノ鼻孔ヨリ炭粉ヲ吸入セシメ之ヲ剖檢セルニ炭粉ハ同側ノ肺臟ニ沈著スルヲ確メ、尙ホ呼吸器ノ模型ヲ作りテ實驗シタルニ空氣ノ流線モ亦液體ノ場合ト同ジク兩鼻腔ヨリ吸入セラレタル後氣管内ニ入りテモ決シテ兩側ノモノ相互ニ混合スルコトナク獨立ノ氣流ヲ作り遂ニ各々其同側ノ肺腔ニ到達スルモノナルコトヲ證明シ得タリ。

是ニヨリテ考フルニ鼻中隔彎曲即チ左右鼻腔ノ廣狹ハ呼吸器内ヲ流動スル空氣ノ運動ニ大ナル影響ヲ及ボシ從ツテ兩側肺臟ニ至ル病原菌ノ空氣ニヨル運送ニ對シテ重要ナル意義ヲ有シ之ガ爲メ左右兩肺ノ罹病率ニ相違ヲ來ス一因タルモノナルコトヲ信ズ。

一七、所謂健康者就中生徒ニ於ケル檢溫成績

(昨年肺結核ノ一般療法ノ一部トシテ報告セル本邦人檢溫成績ノ第二報)

田 澤 鐐 二君 (東京市療養所)
石 川 友 示君

某看護婦養成所ニ於テ生徒六二名ニ就キ今年一月以來各日四回體溫脈搏檢査ヲ施行シ居レリ其溫度表ノ中我々臨牀家ノ日常平溫ト見做シツ、アル標準ニ比スレバ警戒ヲ要スル高溫度ノ者初メノ一ヶ月間ニハ三五名次ノ一ヶ月間ニハ二六名ニ及ベリ。此人員ニ就テ一日中(晝間)ノ最高溫度及最低溫度竝ニ月經前後ノ體溫動搖ニ關スル調査ヲ行ヒタリ。(溫度表ノ無難ト思ハル、者二九人ヲ選ビソレノ延日數一三一六日ニ就テ見レバ最高ニテハ三六・五ヲ示ス日最も多ク最低ニテハ三六・〇ノ日最も多カリキ然レドモ是等ノ數字ノ正確ナルモノハ尙長期ノ觀察ヲ遂ゲ充分被檢者ノ身體檢査ヲ行ヒタ

ル後詳報スベシ。唯全被檢者六二名ニ就テ見レバ最高溫度及最低溫度ノ著シク之レヨリ高キコトヲ述ベ置カントス。參考トシテ某女學校生徒ニ就テ三日間一日一回ヅ、午前十時ヨリ午後二時ノ間ニ檢溫ヲ行ヒタリ七一名ニ就テ二一九回檢シタルニ三六・九ヲ最高トセル者二六回ニテ一名、三七・〇ニ及ビタルハ一七回ニテ一名、三七・一ニ及ビタルハ一八回ニテ一〇名ナリ故ニ今日ノ學校生徒ノ體溫ハ意外ニ高キモノ多數ナリ婦人科の障礙等ニ因ル者ナキニハアラザランモ第一ニハ結核問題トシテ警戒ヲ要スベシ。

一七ニ對スル附議

近 藤 乾 郎 君

女學生ノ健康診斷ヲスル時ニ殆ンド無熱又輕熱ニテ肋膜炎ノ症候ヲ時々見出スコトガアリマスカラ御診察ノ際特ニ御注意ヲ願ヒマス。

一、

永 井 秀 太 君

氣候場所時日ヲ體溫計測ニ考量ニ入レラレタシ。

二、

三 戸 時 雄 君

一日中ノ最低體溫ハ午前六時、三十六度ト申サレマシタガ、之レハ多分覺醒時間中ノコトデアラウト思ヒマス。申ス迄モナク一日中ノ最低體溫時間ハ午前二時頃デスカラ此點ヲ申上ゲテオキマス。

特別講演

「サノクリジン」調査報告

小動物實驗

醫學博士 渡邊 義政君
同 佐藤 秀三君

大動物實驗

岡 治道君

治療實驗

醫學博士 田澤 鏝二君
同 宮川 米次君

第六號掲載ノ豫定

一八、「サノクリジン」治療患者ノ尿検査ニ就テ

佐々 虎雄君(東京療養所)

Kjeld Toring ハ二三六例ノ「サノクリジン」治療患者中六例ニ於テ糖尿ヲ見タルヲ報告セリ、余モ亦一一例ノ「サノクリジン」治療患者ニ於テ二例ハ注射後二時間尿ニ、一例ハ二時間尿及ビ四時間尿ニ、尙一例ハ四時間尿ニ於テニーランドル氏液

ヲ以テ檢シコレヲ黑變スル作用アルヲ認メタリ、次ニ「サノクリジン」其ノモノノ溶液ニ就テニーランデル氏液ヲ以テ檢スルニ同様コレヲ黑變スル作用アルヲ見、製劑ニテ多少ノ相違アルモ其ノ〇・〇一％ノ稀釋ニ於テモ尙其ノ作用ヲ見ル、而シテ前記患者尿ニテ見ラル、程度ガホゞコノ稀釋度ニオケル「サノクリジン」溶液ト等シキ點、注射後二乃至四時間尿ニ於テノミ見ラル、點、尙相當大量注射シタル例ニ於テコノ反應現ハル、點等ヨリシテ余が見タルコノ反應ハ糖尿ニ依ルトスルヨリモ寧ロ排泄サレタル「サノクリジン」ニ歸スベキヲ至當ナルベシトスルモノナリ。

尙余ハ同時ニ見ラル、蛋白尿ニ就テ觀察シタルニ注射後六乃至一〇時間ニ於テ微量ノ蛋白ヲ見爾後ノ尿ニ於テハ既ニ蛋白反應陰性ナル場合シバ、ナルヲ見テ、是等ノ例ニ於テハ治療繼續中ニ常ニ輕度ナル腎臟刺戟ノ存在スルヲ觀過セラ、タメ遂ニハ腎臟炎ヲ惹起スル恐れアルベキヲ注意セントスルモノナリ。

一九、東京市療養所ノ所謂「ソシアル、サーヴィス」ト巡廻看護婦ノ

事業成績ニ就テ

田 澤 鏖 二君(東京療養所)

- 大正十四年及大正十五年ニ於ケル取扱件數分類表供覽。
- 安靜療法ノ一治療項目トシテノ「ソシアル、サーヴィス」ノ意義。
- 入所前ノ患者ニ對スル仕事及其意義。
- 退所患者ノ經過觀察ノ意義及其實行法。
- 爾他ノ社會事業トノ關係。
- 療養所ノ收容量トノ關係。

右ノ諸項ニ就テ述ベタリ。而シテ今日ノ如ク我國ニ於テ結核患者届出ノ實行困難ニシテ、一方ニハ又療養所ノ病牀數モ不足セル時代ニ當テハ療養所事業ヲ宣傳シテ一般のニ其效果ヲ理解セシメ以テナルベク多數ノ申込ヲナサシメ、療養所ノ社會部（「ソシアル」、「サーヴィス」）ヲシテ巡回看護婦（公衆衛生看護婦）其他ノ職員ニ依テ之レヲ監視セシメ居リ其中ヨリ適當ナル選擇ヲ行テ入所セシムルコト結核撲滅事業ノ實功ヲ舉グル上ニ於テ有益ナルベシト思惟ス。

一九二對スル附議

近 藤 乾 郎君

私ハ現今ノ事情デハ結核患者全部ヲ届ケ出ダサシムルコトハ反對デスガ、届ケ出デタ後有效ニ處置スルコトガ出來レバ重症開放性患者ノミヲ届ケ出デシムルコトハ賛成デス、此ノ點ニ就テ御考慮ヲ煩ハシ度イノデス。

二〇、家族間結核感染ノ狀況調査成績

紙 野 圭 三君（大
阪研）

結核馴地ノ多數住民ガ所謂健康ヲ保持シテ結核菌ヲ吞吐シツ、自由ニ活動ヲ續ケ得ル狀態ヲ説明スルモノニハ有馬氏結核感染ノ分類第三類有リ。此ノ事實ノ證左ヲ舉ゲンガ爲メ、大阪市立刀根山療養所十ケ年間ノ記錄ヲ調査シ、確記有ル八九六例ノ既婚者中夫妻共ニ結核ニ罹患又ハ死亡セル者七・六%ヲ得タリ。

此ニ於テ同所入所者或ハ死亡者ノ配偶者健康診斷ヲ企テ、八八例中、二九・六%ノ夫婦共罹病又ハ死亡ヲ見、更ニ中産級以上ノ結核患者ニ就キ（於有馬博士診療所）三二五例中一〇・五%ノ成績ヲ得タリ。即チ總計一三〇九例中九・八%ニ夫婦共罹患ヲ見タリ。所謂夫婦間感染率ハ尙低キモノト信ズ。又該俱罹病率ハツルバングルハルト分類法ト略ボ一致シテ増

加シ、死亡者ノ配偶者ハ最モ多ク俱ニ罹患又ハ死亡セリ。

尙結核患者家族内ノ感染状態ヲ索テ、同居セル尊族及ビ年長近親ニ罹病又ハ死亡者ヲ有シタルモノ（下行性傳染）下級民二七六名中二九・四％、中産級以上二二四名中三六・六％、平均三二・六％ナリ。反之年少者ヨリ年長者ニ感染シタリト思ハル、者（上行性傳染）下級二・九％、中産級以上ニ無ク、平均一・六％ニ過ギズ。尙家族内ニ結核史ヲ有セズシテ發病セル者、下級六七・八％、中産級以上六三・四％、平均六五・八％ナリ、又下級結核患者（感染能有リ）ヲ看護セル尊族一四四例ヲ精査シ九四・四％ハ健全、僅ニ五・六％ニ上行傳染ヲ認メタリ。

男女性別ト成人結核罹患トノ關係ヲ按ズルニ、少クトモ結核馴地ノ下級成人女性ハ男性ニ比シテ罹病シ難キモノ、如シ。以上夫婦間感染ノ罕ナルト、年長者ヘノ上行傳染ノ極メテ罕ナルハ共ニ有馬氏結核感染第三類ノ證左トナスヲ得ベシ。

（自抄）

一〇二對スル附議

一、

今村 荒男君

上行性感染ハ大體ニ於テ少イト云フ事ニ賛成イタシマス、然シ兄カラ弟ヘト云フ場合モアル、カ、ルトキニハ統計ニハドウ云フ風ニ入レラレマシタカ、感染ト發病トノ關係カラ御尋チシマス。

二、

有馬 賴吉君

演者紙野君ガ「感染」トイフ言葉ヲ用ヒタルハ細菌學的、若クハ病理解剖學的ノ問題デハナクシテ、病狀ヲ現ハシタル者ノ意味ニ御解釋アリタシ。

三、

近藤 乾郎君

御調査ヲ最モ愉快ニ拜聽シマシタ、余等ノ平素ノ主張ト全ク一致シテ居リマス、併シ實際傳染シタ者ハ此數ヨリモ一層尠ナイコトハ當然ト存ジマス。

又東大病理ノ緒方博士モ解剖上再外傳染ト確カニ認ム可キ場合ノ非常ニ尠ナキコトヲ私ニ話サレタコトガアリマス。

四、

緒方知三郎君

只今近藤博士ノ御話ノ中ニ私ノ名ガ出マシタノ一言申上ゲマス、東大病理學教室デ岡君ト共ニ結核屍ニ就テ調べタノデアリマスガ、確カニ外發再感染デアルト斷定シ得ル例ハ極メテ少數デアリマス。コレハ初期變化群ガ完全ニ治癒シ石灰化シテ居ツテ他ニ新シイ病竈ヲ見ル場合デアリマシテ内發性再感染(轉移)ノ疑ヒノ全クナイ場合デアリマス、

五、

紙野圭三君

今村博士竝ニ近藤博士ニ對スル答。

私ノ報告ハ要之、有馬博士ノ結核感染分類ノ第三類ニ謂フ『臨牀的疾庖ヲ構成セズ』ト云フ事實ノ證左ヲ舉ゲタモノデ御坐イマス。

一一、「アイヌ」ノ結核

有馬英二君	近璋太郎君	木村亮藏君
	(北海道)	

北海道日高國ニ散在スル「アイヌ」族ノ結核蔓延狀態ヲ知ランガ爲メニ大正十五年八月同地ニ赴キ總人員八百三十七名ニ付テ嚴密ナル診査ヲ行ヒタルニ肺結核五十七名(六・八%)他臟器結核一〇名(一・二%)肋膜炎二八名(三・三%)等ヲ見出セリ本成績ニヨレバ「アイヌ」族ハ結核ニ侵サル、コト和人ニ比シテ高率ナリ、然ナガラ「アイヌ」ノ結核ニハ特異ノ點ヲ見出シ能ハズ、尙一四四名ニ補體結合反應ヲ檢セルニ四五名(三四%)陽性ヲ得タリ。

一一二對スル附議

一、

有 馬 賴 吉君

一、八三七名ノ中一一〇人ノ結核患者アリトスレバ一三%強ニ當リ、其比恰カモ曾テ大阪結核豫防協會ニテ調査セル下級部市民中ノ結核患者比率ニ略々相當シテ(記憶ニヨル)、甚ダ高率ナルヲ見ル。

二、就中老年人ニモ可ナリ多數ニ存在スルハ所謂處女地性猶未ダ可ナリ濃厚ナルヲ語ルモノカ。

三、旭川市ノ外郊近文「アイヌ」部落ノ住民ノ肺結核死亡率ハ同市ノ調査ニヨレバ上表ノ如クデアツテ大正九年ヲ除イテ

ハ特ニ高率トイフベカラズ。大正九年度ハ何カ特別ナル原因アリタルモノカ。

乍序、「アイヌ」族ハ結核ノタメニ不遠絶滅スベシテフ說モアレド、私見ニテハ彼等ハ一般ニ向上ノ意圖ニ乏シキ亡民族タル由ニテ此儘ニテ推移セバ結核ニヨラズトモ亦絶滅スベシト思ハル。

年別	種別	總人口	總死亡	肺結核死	總死亡百ニ對スル肺結核死率
大正九年		三九九	一一	四	三六・二六
大正十年		二九〇	一一	二	一五・三八
大正十一年		二八六	一〇	一	一〇・〇〇
大正十二年		二八二	一三	二	一五・三八
大正十三年		二八五	一一	一	一八・一八

一一、

有 馬 英 二君

只今有馬賴吉博士ヨリ「アイヌ」ノ結核ハ處女地ノ結核ニ似タリトノ御話デアリマシタガ吾々モ初ハソノ様ニ考テ參リマ

シタノデアリマスケレドモ、日高ノ國ハ北海道デハ最モ早ク交通ノ開ケタ地方ナルヨシナレバ處女地トハ云ヒ難イ様デアリマス。

一二一、日光直射結核菌ノ免疫原性及其免疫原的效果(第四報)

宮 木

茂君(大
竹尾阪)

日光直射病原性減弱結核菌ノ免疫原性及其免疫原的效果ニ就キ數年來本學會ニ報告セシガ本年モ引キ續キ其繼續竝ニ新研究ニ關シ發表セントス。

日光直射菌免疫獸ヲ四群トナシ。

第一群 七月第二薄層乾燥五分日射菌

第二群 同 十分同

第三群 同 二十分同

第四群 十二月薄層乾燥四時間半日射菌ヲ以テ免疫的處置ヲ行ヒ

比較對照トシテ

第五群 加熱菌免疫ヲ行ヒ

第六群 トシテ免疫ヲ行ハザル健康獸ヲ行ヒ

是等ニ五種ノ接種法ヲ以テ免疫ヲ遂行シ然ル後以上六群二百頭ニ一勢ニ生菌二皮下接種ヲ以テ其免疫效果如何ヲ比較觀察セリ。

其結果左ノ如シ。

- 一、全ク或ヒハ殆ンド感染ヲ免レシモノ
 - 二、局所結核ヲ現ハシタルモノ
 - 三、汎發結核ヲ現ハスモノ
 - 1、主トシテ急性炎症ヲ現スモノ
 - 2、汎發性粟粒結核ヲ現ハスモノ
 - 3、廣汎ナル乾酪變性ヲ現ハスモノ
 - 往々ニシテ空洞形成ヲ現ハスモノアリ
 - 4、又之反纖維性増殖及硝子樣變性ヲ現ハスモノ
- 以上ノ諸變化ヨリ之レヲ考フルニ
- 日射結核菌ノ免疫原的作用ハ之レヲ對照試驗ト比較スルニ確ニ一定度ニ於テ之レヲ認ムル事ヲ得。
- 即チ余ノ本實驗ニ於テハ日射菌中十分或ハ四時間半竝ニ五分日射菌ノ特定接種法ヲ以テ處置セシ免疫獸ハ其生存期遙カニ長ク又其病變モ遙カニ輕易ニシテ緩慢ナルモノ多シ。

一二三、各色硝子透過光線ノ結核菌病原性ニ及ボス影響

宮 木

茂君(大尾)

曩ニ各季節ニ於ケル日光直射ノ結核菌病原性ニ及ボス影響如何ヲ十四回ノ實驗ニ於テ觀察セシヲ以ツテ茲ニ其繼續試驗トシテ如何ナル種類ノ光線ガ尤モ結核菌ノ病原性或ヒハ抗原性ニ影響アルベキヤヲ研究セント欲シ各色硝子板ヲ透過セラル三樣色光線ニ依ツテ受クル所ノ結核菌ノ病原作用ヲ研索セリ。

本實驗ハ二段ニ分タレ

第一試驗

トシテ六月赤硝子透過日光光線ト單純日光トノ該影響ヲ比較セリ。

第二試驗

十月無色、赤、黃、青硝子透過日光光線ト單純日光トノ該影響ヲ對照比較セリ。

試驗時、直射氣溫 第一試驗 三十五度五分(攝氏)

第二試驗 三十二度五分(同)

同 照射時間 第一試驗 四十五分

第二試驗 二時間ト五時間

本實驗ノ結果。

第一試驗

對照、無照射生菌

赤硝子透過日光光線四十五分照射菌

比較、單純日光四十五分照射菌

第二試驗

對照、無照射生菌

赤硝子透過光線二時間照射菌

同 五時間 同

黃硝子 同 二時間 同

同 五時間 同

青硝子 同 二時間 同

接種獸結核罹患程度

同

同

接種獸結核罹患程度

同

同

同

同

同

著明

著

無

顯著

同

著

相當度

輕弱

顯著

同	同	五時間	同	著
無色硝子	同	二時間	同	輕弱
同	同	五時間	同	無
比較、單純日光	同	二時間	同	輕微
同	同	五時間	同	無

以上ノ成績ヨリ考察スルニ

一、單純日光ハ硝子透過光線ニ比シ結核菌病原性ニ影響スル事極メテ甚大ナリ。

二、有色硝子透過光線ハ其硝子ノ色ニ應ジテ該影響ニ顯著ナル差異アリ。

1、即チ無色硝子透過光線ハ尤モ該影響強大ナリ。

2、有色硝子透過光線中ニテハ黃ヲ以ツテ最大トシ青之レニ次ギ赤ト雖モ全ク該影響ナキニハ非ズ。

一二四、室溫(明暗)。孵溫(暗)。氷溫(暗)ノ結核菌病原性ニ及ボス影響

宮 木 茂君(大尾阪)

數年來繼續セル實驗ニヨリ日光直射結核菌ノ病原性及抗原性ニ及ボス影響如何ヲ觀察セル當然ノ結果トシテ室溫、孵溫及氷溫ニ於ケル明、暗各所ノ非直射光線ノ影響如何ヲ比較觀察シ一ツハ以ツテ日光直射ナラザル介達光線(明所)ト可及的光線ヲ遮リタル最稀薄光線(暗所)ニ竝ニ之レニ伴フ室溫、孵溫、氷溫ノ溫度的影響ヲ長期ニ互リ比較觀察シ一定ノ成績ヲ收メタルヲ以ツテ茲ニ發表セントス。

本研究ハ大正十四年三月以降三ケ年ニ及ブノ實驗ニシテ其一部ハ既ニ昨年ノ本學會ニ報告セシガ、本年ハソノ追試竝ニ他ノ多クノ試驗ニ就キ發表ス。

本實驗ノ結果ハ極メテ種々雜多ナルモ大約次ノ如シ。

一、室溫。

I、室内明所ニテ

A、剝離菌

a、濕潤菌ハ二十日間在置ニテハ未ダ強病原性ヲ保有シ五十日ニテ全ク滅殺ス。

b、脫水菌ハ十日間在置ニテハ未ダ病原性ヲ保有スルモ三十日ニテ全ク滅殺ス。

B、培養器菌ハ二ヶ月間在置ニシテ未ダ病原性ヲ保有スルニ五ヶ月ニテハ甚ダシク病原性ヲ消失ス。

II、室内暗所ニテ

A、剝離菌

a、濕潤菌ハ五十日間在置ニテ未ダ病原性ヲ保有スルモ百日ニテハ滅殺セラル。

b、脫水菌ハ三十日間在置ニテ未ダ病原性ヲ保有スルモ五十日ニテハ滅殺サル。

B、培養器菌ハ五ヶ月間在置ニテ未ダ病原性ヲ保有ス。

二、孵溫

A、剝離濕潤菌

第一、二三回反復實驗ニ於テ七日間在置ニテハ強病原性ヲ保有シ十日間在置ニテハ甚ダシク病原性ヲ滅却サレ二十日間在置ニテ全ク病原性ヲ脱却サル。

III、冰溫

A、剝離菌

a、濕潤菌ハ百日間在置ニテ未ダ病原性ヲ存スルガ如キモ二百日以上ニテハ殆ンド滅殺サル。

b、脫水菌ハ五十日間在置ニテハ、ナホ病原性ヲ保持スルモ百日以上ニテハ殆ンド滅殺サル。

B、培養器ハ五ヶ月間在置ニテハ未ダ病原性ヲ有ス。

以上ノ成績ヲ考察スルニ

- 一、結核菌ハ室内ニ於テ光線或ハ溫度ニヨリ影響サル、所大ナリ。特ニ
 - 1、明所即チ介達光線ヲ受クル室溫ニ於テハ比較的容易ニ其病原性ヲ脫失サル、如シ。
 - 2、暗所即チ最稀薄光線ヲノミ受クル室溫ニ於テハ稍々其影響前者ニ比シ減弱ス。
- 二、結核菌ハ孵溫(暗)ニヨリ影響サル、所甚大ニシテ極メテ速カニ其病原性ヲ滅殺サル。
- 三、水溫(暗)ニ於テハ結核菌ノ病原性ハ比較的長ク保持サル。
- 四、室溫、冰溫ノ結核菌病原性ニ及ボス影響ハ菌ノ含有水分ニヨリ著シキ差異アリ。即チ脫水菌ハ濕潤菌ニ比シ其影響ヲ蒙ムル事大ナルガ如シ。

一二四ニ對スル附議

有 馬 賴 吉君

質問。脫水ト稱セラル、方法ハ如何デスカ。

討論。單ニ脫水ト稱スル場合ハ恒量マデ乾燥シタルモノ、如ク解釋セラル、宮木君御演說ノ趣旨ニアハ孵卵器乾燥ト稱スル方穩當ナラン。何トナレバ眞ノ脫水即チ恒量ニマデ脫水スレバ菌ハ其瞬間ニ死滅スルモノデアルカラ。

一二五、B、C、G、菌胃内注入ニヨル人型結核

菌腸管感染ニ對スル免疫ニ就テ

佐 竹

清君(大
醫大阪)

演者ハB、C、G、菌腸管送入ニヨリテ人型結核菌ノ腸管感染ニ對スル免疫ノ發生スルヤ否ヤヲ檢セントシテ、B、C、G、菌一定量ヲ海狸胃内ニ注入シ一定時ノ後人型結核菌ヲ胃内ニ注入シ腸管ヨリ感染セシメ、其病變ヲ檢シタルニ、免疫ヲ成立セシメ得ル事ヲ認メタリ。

二五ニ對スル附議

一、

渡邊 義政君

カルメット、グエラン氏BCGヲ用ユルナレバ必ず幼若ナル動物ニ即チ「モルモット」ナレバ生後四、五十日ノモノニ經口的ニ與ヘ決シテ注射ヲ致サナイ事デアル。感染モ亦タ同様ノ方法ヲ選ブ事ガ條件デアル。病原性ヲ檢査スルニ必ずカルメット、グエラン氏培地ニ二ヶ月以上ノ培養ヲナシタルモノヲ使用シBCGヲ普通培地ニ還元シタルトキハ之ヲBCGト云ハナイ方ガヨカラシ。

二、

今村 荒男君

BCGノ名ヲ掲ゲル事ハ不可デアルトノ渡邊博士ノ御意見ノヤウデアリマス、BCGノ定義ニ就テ解釋ノ差デアリマスガカルメット博士ノ報告ニヨレバBCGト云フモ差支ナイト思ヒマス。而シ此際カルメット博士ニ御迷惑カケテモ不可デアリマスガ大體ニ於テカルメット博士ガ用イラレテ居ルBCGニ近イ弱毒ノ牛型ト云ツテヨイノデアリマスカラ一種ノ弱毒牛型ヲ表ハスモノトシテカルメット博士ガ人體ニ用イラレテ居ルモノトハ別ノモノデアルモノト認メタイタダキタイ。

二六、免疫血清ノ結核菌ニ對スル減毒性ニ就テ

野尻 英一君(大
阪醫大)

結核免疫血清ノ結核菌ニ對スル殺菌素ニツイテレーメル氏等ノ研究アレドモ未ダ確實ナラズ故ニ演者ハカ、ル物質ノ有無、及ビ其本態ヲ究メントシテ結核及ビ健康海狸ノ血清ト結核菌ヲ混ジ種々ナル時間三十七度ノ孵卵器内ニ放置シコレヲ健康動物ノ皮下ニ注射シ其毒性ヲ比較シタリ。然ルニ免疫獸血清ト混ゼル結核菌ニ於テハ海狸ニ對スル毒性ノ減弱セルコトヲ見タリ。

之ニ依リテ結核免疫獸ノ血清中ニハ結核菌ニ對シテ減毒性ニ働ク物質アルコトヲ證明シ之ガ本態ニ就キ研究ヲ重キツ、アリ。

一二六ニ對スル附議

今 村 荒 男 君

感染ヲ得タル動物ガ最モ強イ免疫ヲ得テ居ル故ニ罹患動物ノ血清ヲ免疫血清ト云ツテモ差支ナイガ但シ其説明ヲ要シマス事ハ勿論デアル。

一二七、結核免疫研究ノ綜括的報告（其二）

豫防接種試驗ノ成績

青 山 敬 二 君
太 繩 壽 郎 君（大療養所）
有 馬 賴 吉 君

結核罹患個體ノ免疫性ニ就テハ今日既ニ異議存セズト見ルモ、感染ナキ個體ニ對スル免疫賦與ノ可能性ニ關シテハ疑念

依然トシテ存スルガ如シ。

余等三名ト小山竝ニ紙野ハ本問題ニ就テ、屢々業績ヲ發表シ來レルガ、ソノ主眼ハ、菌ノ自然性ヲ可及的保存セシメタルA Oノ豫防效價ヲ知ルニ在リシガ、傍ラ、之ト對比シテ觀察セルモノニ、普通培養生態弱毒結核菌乳劑ト石炭酸加A Oアリ。此等ノ成績ヲ綜合スルニ、豫防接種材料ノ相違、貯藏方法如何ニヨル減毒程度ノ差、接種ノ回數、間隔、分量竝ニ方式如何、感染菌ノ毒性、用量ト感染方法、實驗計劃ノ按配、動物ノ個性竝ニ四圍ノ情況等ニ從ツテ、成績ハ毎常一樣ナラズ、時ニ良好、時ニ然ラザルヲ見タルガ、要スルニ結核免疫賦與ハ接種苗ノ改良ト接種方式ノ工夫ヲ俟ツテ可能ニシテA Oハ此目的ニ對シ有望ナル接種苗タリト云フニ歸結セリ。

余等ハ本研究ヲ尙續行中ナルガ、進ンデハ、既存竝ニ今後出現スベキ諸種免疫劑ノ比較研究ヲ遂ゲ其勝レタル物ニ據ツテ冒頭ノ疑點釋明ニ努メン事ヲ期スルモノナリ。

一一八、結核免疫ノ研究（第十六報）

「モルモット」豫防接種試驗 其七

太 繩 壽 郎君^{（大養所）}

「モルモット」六頭一組トシ五群ヲ準備シ、ソノ第一乃至第四群ノ各三頭宛竝ニ第五群六頭ニ、豫防接種ノ目的ヲ以テ『A O』舊劑○・五厩ヲ、一週ヲ經テ同ジク一○厩ヲ、後チ二週ヲ經テ『A O』新劑○・五厩ヲ各腹部皮下ニ接種シ、更ニ二週ヲ經テ、第一乃至第四群ノ豫防接種動物、竝ニ各群非豫防接種動物ニ對シ感染ノ目的ヲ以テ、刀根第三一號菌（強毒株）ノ普通培養乳劑○・一厩乃至○・○○一厩ヲ腸部皮下ニ接種シ、第五群ハ感染セザル對照ト定メ、而シテ感染後五週ヲ經テ撲殺剖檢シ、其病變發現程度ヲ觀察シ對照ト比較シ、各群ヲ一括シテ其成績ヲ考察批判スル時ハ、豫防接種感染動物一頭中完全免疫三頭、殆完全免疫三頭、不完全免疫四頭、免疫不能二頭ヲ算スル結果ヲ得タリ。

二九、A O「接種動物ニ於ケル結核免疫

大 平 得 三君
渡 邊 朱 一君
(福岡大)

余等ハ有馬博士等ノ『A O』ヲ用ヒ「モルモット」ニ豫防接種ヲ施シ一定時日ノ後(一)結核菌浮游液ノ皮下注射、(二)吸入感染、(三)結核罹患獸トノ同棲ノ三方法ニヨリテ感染ヲ計リ、各試獸ノ體重竝ニビルケ反應ヲ注意シツ、十數週後ニ剖見セシニ、結核獸トノ同棲試驗ニ於テハ對稱獸、豫防接種獸共ニ未ダ結核病變ヲ呈セザリシモ結核菌浮游液ノ皮下注射ニヨル感染試験ニ於テハ豫防接種獸ニ於テモ多少ノ病變ヲ起セルモ對稱獸ニ比スレバ一般ニ輕度ナリ、更ニ吸入試験ニ於テハ對稱獸ハ悉ク(五頭)著明ノ病變ヲ起セルニ、豫防接種獸(四頭)ニ於テハ全ク病變ヲ認メザル結果ヲ得タリ。

二九ニ對スル附議

一、

今 村 荒 男君

一、「モルモット」ニ於テビルケ反應ハ如何ニ實施ナサイマシタカ。「モルモット」ニ於テハロエメルノ皮内反應ノ方ガ確實ト思ヒマスガ。

二、吸入感染ニハ菌ガ肺ヘ行クカ行カヌカニ就テ御考ヲ承リタイト思ヒマス。

二、

大 平 得 三君

一、ビルケ氏反應施行方法。

海狸背部ニ硫化「バリウム」、亞鉛華澱粉ヲ等量ニ水ニテ適度ニ混ジタモノヲ塗布シ毛ヲ除去シ、其部ヲ「ランセット」

ニ依リ亂切シ舊「ツベルクリン」ヲ用ヒ行フ。

二、吸入感染ニ依ル菌侵入部位ハ、全部肺臟ニ依ルモノトハ考ヘザルモ、全然ナシトハ思ハレズ。

三〇、結核免疫研究ノ綜括的報告（其二）

治療試驗ノ成績

太 繩 壽 郎 君
青 山 敬 二 君（大 阪 療 養 所）
有 馬 賴 吉 君

余等ハ余等ノ創製シタル「A O」ヲ以テ、多數ノ動物接種結核ノ治療ヲ企畫シタルコト數年ナリ、即チ家兎ニハ眼前房內接種結核、幼弱家兎扁桃腺接種結核ニ對シテ、又「モルモット」ニハ皮下接種結核ニ對シテ、「A O」ノ一定量ヲ血管內或ハ皮下注射ニヨリテ治療ヲ實施シタリ。而シテ「A O」ノ應用方法、使用量、持續、竝ニ注射間隔、感染菌株毒性ノ強弱、感染方法ニヨリテ必ズシモ常ニ一致シタル治療效果ヲ舉ゲ得ルニ至ラザリシト雖、余等ハ治療成績ヲ綜合的觀察シ、コレヲ批判スル時ハ次ノ諸點ヲ確證シ得ルナリ。

（一）「A O」ハ余等ノ使用量ニテハ結核動物ニ對シテ所謂「ツベルクリン」類似ノ反應ヲ有セズ。

（二）感染局所ニ發生シタル病竈ハ「A O」治療ニヨリテ或ハ全ク吸收セラレ、或ハ病變ヲ遺殘スルモ炎症症狀ハ全ク去リ限局性トナリ漸次吸收ノ傾向ヲ示ス。

（三）內臟ニ進行性ノ病變ヲ呈スルモノ全クナキカ、或ハコレアルモ症狀極メテ輕微ナリ。

（四）感染ニ因スル其部位腺ハ腫脹スルモ、硬結性ニシテ、乾酪變性ニ陷ルコト全クナキモノ多ク、或ハ極メテ輕微ナリ。

（五）治療動物ノ體重ハ殆ンド常ニ増加シ、且ツ其增加率大ナリ。

(六) 治療動物ノ生存持續永シ。

(七) 對照動物ノ病變ハ常ニ進行性ニシテ、從ツテ内臓ニモ高度ノ病變ヲ有スルモノ多シ。

(八) 由是、「A O」ハ試獸ノ接種結核ニ對シテモ確實ニ治療的效力アルモノナリ。

三二、結核免疫ノ研究 (第十八報)

家兔慢性結核ニ對スル「A O」ノ治效

谷 口 修 一君 (大療養所 阪)

青山氏法ニヨリ幼家兔ノ扁桃腺部、軟口蓋等ニ人型結核菌ヲ接種シ慢性結核ヲ起スベキ要約ヲ與ヘ、三週間ノ後「A O」ヲ以テ治療ヲ開始セリ。其結果、對照家兔ニ在テハ發育阻害セラレ、皆強度ノ病變ヲ呈スルニ反シ、治療家兔ハ良ク發育シ或ハ全然病變ヲ呈セザルカ、若クハ極メテ輕度ノ病變ヲ接種部竝ニ肺臓ニ認メシムルニ過ギズ。

三二、結核免疫ノ研究 (第十七報)

家兔眼接種結核ニ對スル「A O」ノ治效 (其二)

谷 口 修 一君 (大療養所 阪)

一、成家兔六頭ニ刀根第十一號菌株〇・〇〇二瓏ヲ其前眼房ニ接種シ、虹彩ノ充血ト結節ヲ認メタル後「A O」第一號、第二號、第三號ヲ各二週間ノ間隔ニテ皮下ニ注射シ、更ニ第一號ヲ以テ二回注射シタルニ、對照家兔ハ皆葡萄腫ニ陥リタルニ、治療家兔ハ治療ノ回ヲ重スルニ從ツテ病變消失セリ。

二、成家兔七頭ヲ用ヒテ同様ノ眼感染ヲ施シ、三週間ヲ經テ病變著明ナルニ乘ジテ同様ノ治療ヲ施シタリ。別ニ對照ト

シテ治療ヲ施サルモノ、市售ノ某々ニ製劑ヲ用ヒテ治療ヲ試ミタルモノニ在テハ何レモ重症ノ眼結核竝ニ全身結核ヲ起シテ早ク斃レタルニ、治療家兎ニ在テハ治療開始後三ヶ月ニシテ病變全ク消失セルモノ、及ビ限局性ノ小ナル病變ヲ殘シテ漸次吸收ニ傾ケルモノトアリ。

三三、眼結核特殊療法ノ實驗的研究

石 田 松 雄君(大阪)

「AO」ニヨル結核特殊療法ニ關シテ次ノ動物實驗ヲナセリ。

療法トシテハAO一號 滅菌ノ體重 50 ccヲ一週一回、沃度石灰 3× 滅菌ノ體重 50 ccヲ隔日ニ皮下注射ヲ爲ス。實驗ハ一單位ヲ五頭トナシ一定量ノ結核菌ヲ前房中ニ接種シ、其ノ中二頭ハ菌接種後直チニ右ノ療法ヲ開始シテ豫防作用ヲ檢シ、二頭ハ虹彩ニ結節發生ト同時ニ治療ヲ開始シテ治療作用ヲ檢シ、他ノ一頭ハ加療ヲ爲サズ對照ト爲セリ。

右實驗成績ハ接種セル眼結核發病ヲ或ハ抑制シ、或ハ豫防シ、又一定ノ治療作用アルコトヲ認メタリ。

三四、家兎結核ニ對スル「AO」ノ效果

宇 佐 美 五 郎君(大阪)

余ハ家兎耳翼ニ一定量ノ結核菌ヲ接種シソノ一定ノ大サニ達スルヲ待チ對照及本試驗ノ二群ニ就キテ色寫眞ニヨリソノ吸收度ヲ比較觀察セリ。ソノ效果別表ニ示スガ如クAO注射動物ハ對照動物ニ比シ極メテ高度ナル吸收率ヲ示セリ。

三五、結核免疫研究ノ綜括的報告 其三 臨牀的應用ノ成績

有馬 賴吉君
太繩 壽郎君(大阪)
青山 敬二君

「A.O」ノ臨牀的應用ノ成績ハ其使用法ト使用量竝ニ例數ノ關係デ之ヲ三期ニ分ツテ考ヘルヲ便トスル。第一期ハ大正九年首ヨリ同十一年末頃ニ至ル間ニテ無規則經驗時代トモ謂フベク、例數比較少ク、主トシテ生菌ヲ用ヒ、各個例ノ成績ハ時ニ驚嘆スベキモノアリタル傍ラ亦種々ノ小ナル故障例之バ注射局所ノ反應、熱反應等ヲ經驗シタ。其第二期ハ大正十二年ヨリ同十四年秋季頃マデノ間デ、菌ノ繁殖力ナキモノヲ用フルニ至リ、大量主義ニ傾キタル結果、成績概シテ不良ノ時代デアル。第三期ハ大正十四年冬以降デアツテ最多數ノ經驗ヲ積ミ、同好者ノ稍々多數ニ依テ各種各核性疾患ニ互リテ經驗サレ、初メテ「A.O」ノ眞價ヲ發揮スルノ時期ニ移ラントスルモノデアル。其結果「A.O」ハ一、無害無危險デアツテ、二、其未ダ著シキ臨牀的症狀ヲ現ハサル結核例ニ對シテ所謂發病豫防的ニ用ヒラル、場合ハ最モ簡單的確ニ其目的ヲ達スルヲ得ベク、三、臟器結核ヲ起シタルモノニテモ其未ダ初期ニ屬スルモノハ亦殆ンド例外ナキ程ノ奏效アリ。四、各種結核ノ中等症ニ對シテハ亦甚ダ有效ノ作用ヲ呈シテ屢々所謂全治シ效ヲ奏シ、五、重症ニ對シテモ往々輕快、生命延長ノ效アリ。

六、些モ結核ノ兆ナキ個體ニ僅少ノ接種ヲ施シテ罹患發病豫防ノ效アルモノト認メラレル。

三六、結核免疫ノ研究 第十九報

「A O」ノ使用法ニ就テ

有馬 賴吉君(大研阪)

「ツベルクリン」ノ使用法ニハ今日ニ至ルモ猶未ダ世界的統一ヲ得ザルガ如ク、結核ノ特殊療法ニ於ケル製劑ノ用量ト用法トヲ萬全ニスルハ困難ナル事ニ屬ス。「A O」ノ初期、生菌ナリケル頃ハ少量細心主義ニ始マリ中頃稍々大量頓用主義トナリ、増殖力ナキ菌製劑トナルニ及ビテ漸ク大量頻回主義ニ移リ、其誤レルヲ覺リテ微量頻回法ヲ試ミ、四タビ轉ジテ現行ノ平均二週毎ニ微量中量ヲ反復スルノ統一ヲ得タリ。然レ共猶未ダ萬全ト稱スルヲ得ズ、就中眼科方面ニテハ微量ノ每週法ヲ以テ無害有效トナス。其用途ハ豫防的治療法ニ最モ勝レ、普通ノ治療的應用竝ニ真正豫防的ニモ用フルニ堪フ。

二七、内科的結核性疾患ニ對スル「A O」ノ影響

飯田 豐三君(福大岡)

(一) 肺炎加答兒症、肺浸潤症及ビ肺結核症ニ別ツテ「A O」注射ヲナシ、其病狀、經過ヲ觀察セリ。

(二) 喀痰ヲ染色檢鏡シ、結核菌ノ變化ヲ追究シタリ。

肺炎加答兒症ニ於テハ、多クノモノハ此ノ注射ニヨリテ食欲ノ増進、體重ノ増加及ビ體溫ノ降低ヲ見タリ、體重増加ノナキ場合ニ於テモ、外觀、氣分著シク佳良トナレリ。

浸潤症ニ於テモ尙ホ體重ノ増加、病狀ノ減退ヲ呈セリ、然ラザルモノニ於テモ、病狀停頓ノ態ヲ示セリ。結核症ニ於テハ其效果少シト雖モ尙之ニヨツテ體溫ノ降低、食欲増進セルモノアリキ。

喀痰ニ結核菌ノ證明セルモノハ、時々ノ檢鏡ニヨリ本菌ノ減少及ビ形態上ノ變化ヲ見タリ。

三八、一三外科的結核竝皮膚結核ニ對スル「A O」ノ影響

飯田 豐三君(福岡)

- 一、痔瘻(結核性)ヲ「A O」注射ニヨリ全治ト、
- 二、脊椎「カリエス」症ニ於テ見ル肋間神經痛牽引痛ナドノ症候ヲ本注射ニヨリ全ク消失セシメ且ツ該疾患部モ殆ンドナク全治ト認メタリ。
- 三、小兒頸腺淋巴腺腫ニ試ミテ其ノ效果ヲ見タリ。
- 四、紅斑性狼瘡症ニ著效ヲ奏シタリ。

三九、淋巴腺結核ニ對スル「A O」ノ效果

宇佐美五郎君(大阪)

余ハ主トシテ第一期淋巴腺結核患者五十例ニ「A O」ヲ使用シソノ局所腫脹ヲ、計數的ニ觀察シ尙一般狀態ヲ考察シ次ノ如キ結論ヲ得タリ。

- 一、五十例中十五例ハ淋巴腺腫ノ明カニ消退セルヲ認メタリ。
- 二、十一例ハ淋巴腺ノ腫脹減退乃至減數ヲ認メタルモ尙ホ全ク吸收ニ至ラザルモノ。
- 三、十三例ハ多クハ目下治療ヲ繼續中ノモノニシテ腫脹減退乃至減數ヲ示シツ、アリ。
- 四、全然認ムベキ效果ナク反ツテ局部竝ニ全身狀態ノ惡化セルモノ二例。

五、三回以下ノ注射ニテ其後注射ヲ受ケザルモノ九例(從ツテツノ效果不明ナリ)。
以上五十例中多クハ體重ノ増加ヲ示シ減少ヲ示シタルハ第四項ノ二例ナリ。
是レニ由リテ之レヲ觀ルニ第一期淋巴腺結核ニ對シ「A O」ハ相當ノ效果アリシヲ斷ゼントス。

四〇、眼結核ノ特殊療法

中 村 文 平君(大
阪)

演者ハ明治四十四年以來十六箇年ニ互リテ自ラ行ヘル眼結核ノ各種特殊療法ヨリ得タル成績ヲ統計的ニ觀察シ、「ツベルクリン」ヲ大量注射スル事及之ヲ増量シテ注射スル事ノ非ナルヲ知り、最新「ツベルクン」ノ〇・〇〇一%溶液一・〇蚝ヲ一週二回増量スル事無シニ注射スル法及A O第一號一・〇蚝ヲ一週一回ヅツ増量スル事ナシニ注射スル法ノ卓越セルヲ知り、就中A Oヲ以テスル療法ノ最モ優秀ナルヲ知レリ。

注射回数ハ統計ヨリ觀察シテ最新「ツベルクリン」ハ五十回以上、A Oハ二十回以上ヲ可トス。
次デ演者ハ其行ヘル療法ノ意義ニ對シ説明ヲ加ヘ、尙此療法ニ三%沃度石灰ノ筋肉内注射ヲ隔日ニ行フ事、日光浴及其他ノ全身療法ヲ同時ニ行ナヒ著效アル事ヲ附言セリ。

四〇迄ニ對スル附議

一

田 澤 鐸 二君

唯今有馬君ヨリ東京市療養所ノ成績ノ無害無效トイフ結果デアツタコトノ御話ガ出マシタノデ一寸附言シテ置キタイト思ヒマス、東京市療養所ニ於テモ有馬君ノA O試驗ニ興味ヲ有シTY菌ニ石炭酸ヲ加ヘタモノ又ハA O菌ヲ以テ前年來試驗ヲ行ヒマシタ。昨年迄ノ所デハ良結果ノモアリ不良結果ノモアリ不變モアリトイフ成績デ、目算上一般療法ノミニ

依タモノト大差ナカツタノデ無害無效ト申シマシタヤウニ記憶シテ居マス。

我々ノ處デハA〇以外自製ノモノハ石炭酸ヲ加ヘテ用ヒテ居リマスガ、效ノアルモノナレバソレデモ有效ナ筈ト考ヘテ居マス。A〇モ今後ハ殺シタモノヲ御使用デ種々御變更ノ由デアルガ、我々モ亦機會ヲ得テ再試験ヲシテ見タイト考ヘテ居マス。

一一

三野原 愛四郎君

結核殊ニ外科的結核中淋巴腺結核モ特別ノ處置即チ特種療法ヲ施サズ一般療法ニヨリテ大人肺炎加答兒ニ合併セルモノガ多クノ場合ニ於テ完全治癒シ得ルモノニシテ今其數字の說明ヲ加ヘザルモ甚シキ一例ハ余ノ下女左右頸部ニ鶏卵大ノ腺腫アルモノ單ニ肝油ヲ與ヘシノミニテ一ケ年後ニ完全ニ吸收セラレタルコトアリ結核ノ經過ハ非常ニ多種多樣ニシテ一般療法ノミニテ驚クベキ良經過ヲ取ル例少ナカラザルコト一般ニ認メラル、處ナリ。

四一、紡績工場ニ於ケル結核對策トシテノ「A〇」第二回報告

丸 岡 荒 太 郎君(大阪)

大正十五年三月以後D紡績工場ニ於ケル職工六八〇名ニ「A〇」ヲ豫防的ニ使用セリ。

「A〇」接種前ニ於ケルビルケー反應ハ之ヲ檢シタルモノ六四一名中強度陽性(有馬氏分類)ノモノ八七名ナリ。而シテ接種以後昭和二年二月ニ至ル一ケ年間に結核性疾患ニ罹レルモノ一〇名アリ。

此ノ一〇名中一名ハビルケー反應弱度陽性ノモノ一名ハ之ヲ檢セザルモノニシテ共ニ現在全治セリ他ノ八名ハ全部強度陽性ノモノニシテ三名ハ死亡シ五名ハ療養中ナリ。

ビルケー反應強度陽性ノモノニハ接種回数ヲ増ス事ニヨリ一層ノ效果ヲ收メ得ラル、ニ非ザルヤヲ豫想スルモノナリ。

四二、結核免疫ノ研究第二十報

弱質小學兒童ニ施セル「A O」接種ノ成績

有馬 賴吉君 (大阪)
渡邊 三郎君 (大研)

結核馴地ニ於ケル學齡及ビ其前後期兒童結核感染ノ危險アリテ所謂弱質ト稱セラル、者、若クハ既ニ若干ノ結核症狀ヲ現ハス者ニ對シテ之ヲ强健ニ導クノ途、殊ニ慢性臟器結核ノ發生ヲ豫防スルノ策ハ識者ノ夙ニ留意シ、苦慮シ、劃策シテ尙未ダ成案ヲ得ザル所タリ。偶々某村小學校包容兒童二千四百、中ニ八百餘ノ所謂腺病弱質兒童アリ、依賴ニ應ジテ其四百餘名ニ「A O」ヲ以テ或ハ一回、或ハ二回、多クハ三回ノ接種ヲナシ、其前後ニ互リテ體重、起居、動作、食慾、榮養等ノ變動ヨリ、既ニ存在セル病的症狀ノ移動ヲ家庭ト學校トヲ通ジテ觀察シ、其大多數ニ於テ奏效ヲ認メ、病的症狀ノ芟除ニハ偉效ヲ奏シタルモノアリタリ。

四三、虛弱者及結核患者ノ家族ニ對スル「A O」接種ノ影響

大平 得三君
飯田 豐三君 (福岡)
渡邊 朱一君

演者等ハ所謂虛弱者及結核患者ノ家族中ニハ多數ノ潛伏結核アルベキヲ豫想シ、「A O」接種ガ如何ナル影響ヲ現ハスヤヲ見ントシタリ。是將來、學校、工場、鑛山等ニ互リ重大ナル意義ヲ有スル問題ナリト考ヘタルニヨル。カクテ大人小兒二百數十名ニ就キ三回乃至數回ニ互ル微量接種(年齡ニヨリ〇・〇〇〇三「ミリグラム」菌量ヨリ、〇・〇〇〇五ニ至ル量

ニ於テ)ニヨリ食欲増進、肥満、元氣増加、疲勞感消失又ハ減退、血色改善、學校缺席率減少、永續セル咳嗽ノ消失又ハ輕減、風邪度數減少、永續セル慢性鼻炎ノ消失、肩癰ノ消失、尿頻回ノ改善、頸腺腫脹ノ縮小又ハ消失等ノ結果ヲ見、自覺的又ハ他覺的ニ健康者ナリトノ感ヲ有スルニ至リシモノ多キヲ述ベ又接種ニヨル惡影響(發熱等)極メテ微弱ニシテ何等ノ反應ナキモノ多ク又膿瘍形成等ノ全クナカリシコトヲ述ベタリ。

四二及四三ニ對スル附議

一、

石 田 誠 君

結核馴地ノ學齡及ビ其前後期兒童結核感染ノ危險アリテ、所謂弱質者若クハ既ニ若干ノ結核症狀ヲ現ス者ニ對シテ之ヲ強健ニ導ク爲ニ數多ノ所謂腺病弱質兒ニ「A O」ヲ接種サレテ其大多數ニ奏效ヲ認メ病的症狀ノ芟除ニハ偉效ヲ奏サレタル成績ハ結核撲滅ノ上ニ有益ナ事柄デアリマス、處デ元來弱質者、虛弱兒、小兒腺病又ハ小兒結核ハ唯體表的ニハ簡單ニ之レヲ區別スル事ハ實際ニ頗ル困難ニシテ唯漠然ニ區別スルニ過ギナイノデス。同博士ハ是等ノ患兒ニ就テ充分ニ臨牀的ニ檢査シテ「A O」ヲ接種サレタノデアリマスカ、然ラザレバ虛弱兒ニテ各種臟器ノ障礙ニ因リテ其差異ノアル事ト思ヒマス其邊ヲ充分ニ伺ヒタイノテアリマス。

二、

大 平 得 三 君

虛弱者トハ腺病質ノモノ多數ニシテ一般ニ弱キモノ、但器質的心臟疾患、脚氣、腎臟炎等ヲ除外シタルハ論ナシ。